言葉の恵み
～新年の始めに④～

俳句に特に関心があったわけではない。「小料理屋の奥座敷で馳走を食し、美酒に酔いながら俳句を楽しむ」という言葉に誘われて呆花（ほうか）会に入って早や六年になる。

よく知らずに入会して驚く。現代俳句の山口県の第一人者、俳句誌「草炎」を主宰する久行保徳さん（句会では宗匠と呼ぶ）、詩人、女性同人詩誌「らくだ」事務局の、というより本紙月曜日連載の「走れ！おばさん」の中村光子さん、前周南文化協会長で俳人の吉村徳昌さんなどそうそうたるメンバーだ。

先輩がかかわる句誌と詩誌

しかし、そんな肩書きには関係なく全員が自分の思ったことを発言する楽しい句会である。入会を機に一念発起して努力することもなく、いつも締め切り直前に句を詠み、怖いもの知らずで続けてきた。当然のことながら一向に上達せず、自分にはセンスがないからそろそろ潮時かと思う。

昨年十二月、吉村さんが八十歳の高齢になったからと退会された。以前から奥様の体調がよくなく、夜、家を空けるのが難しくなられたのだろう。

吉村さんは常々「俳句は上手に詠むことよりも楽しめばよい。だから僕はこの句会が好きだ」と言われていた。句集「鶏肋（けいろく）」も出版されるほどのベテランなのに、私のようにど素人の句にも温かい言葉をかけて下さる。その吉村さんが止められたのなら自分もこの機にと本気で考える。

しかし「残された人生は人との交わりを大切に生きる」というスローガンに反し、親しくなった友を失うことにもなるので、初句会に参加する。

そこで久行宗匠から二月六日の旧徳山市出身の俳人、宇多喜代子さんの講演会のチラシをもらう。宇多さんの名前も知らなかったが、演題の「俳句の恵み」という言葉が新鮮で、何かひきつけられる。

招待券も入手し、楽しみにしていたが、風邪で寝込み、参加できなかった。いつもなら「自分は俳句に縁がないのだ」と思うところだが「俳句の恵み」という言葉が頭から離れない。

教会では「神の恵み」という言葉をよく使うが、俳句の恵みとは何だろう。

今までたった十七文字では十分に表現できないと思っていた。そうではない、十七文字が故にその余白にある広がりと余情。「草炎」の中に「あいまいであるからこそ受け止めるのに想像が働く」ともある。そして季語という共通の土俵。そうだ!!俳句は先人が残してくれた言葉の恵みではないだろうか。

講演会の新聞記事に「記憶の底から言葉にして再生することが俳句の恵み」とある。身の周りの出来事を注意深く記憶に留めて十七文字に託す。それを共有、共感する。

神にしろ、言葉にしろ、日常生活で空気のように接し、それからどれだけの恵みを与えられているかを気付かないでいたのだ。人間の長い営みの中から生まれた言葉の恵み。俳句もその一つなのだと初句会を思い起こす。

「鶏肋と詠みし席欠け初句会」

吉村さん（前列右から２人目）が欠け、寂しくなる